



山形浩生の
世界を読み解く
叢智

結局、そういうことだ。

Yamagata Hiroo

著作・翻訳家。1964年、東京生まれ。東京大学およびMIT修士課程修了。某大手シンクタンク勤務の傍ら、経済、ITなどの分野で活躍。「要するに」(河出文庫)、「たかがバロウズ本。」(大村書店)など多数。
<http://cruel.org/jindex.html>

も

豚インフルエンザとは、言わなくなったけれど、便利なので使わせてもらおう。これを書いている時点で、日本での豚インフルエンザ報道&騒動は二度ほどの波を経ている。

最初のもは、四月末あたり。豚インフルエンザが最初に報道されたときだった。メキシコで感染者千五百人、死者百五十人ですさまじい勢いで拡大しているという報道がなされた。映画『バイオハザード』みたいな状態をだれもが連想して、みんなふるえあがったし、スペイン風邪の再来だ、このままだと何百万人死ぬ云々といった脅し報道がそこらじゅうにあふれていた。豚を全部殺せ、とかメキシコ便は全部止めろ、とかいうむちゃくちゃな話が平気で言われ、日本以外の一部の国ではそれを実際にやったところまであった。ところが実際には、その時点ですらメキシコの死者はそれらしいものだと20人、実際にきちんと調べると九人。他の人は、普通のインフルエンザだったり別の肺炎だったり。感染者数も増えてはいたけれどメキシコ以外ではほとんど死者も出さず、用心にこしたことはないけれどそこまで騒がなくていいか、という感じだった。

ところが、日本人で感染者が出たという話になって、にわかにもまたこの手の報道が活気づいている。いまや空港のアメリカ帰国便は阿鼻叫喚。数時間の監察状態で、手間はかりかかるものすごい検査消毒措置。飛行機から出てきた検疫官が防護スーツを完全消毒される映像とかも報道されて、ひたすら危機感が煽られている。さて、これがいかにまぬけな事態か、というのは言うまでもない……と思うんだが、そういう報道が実際にされているというところは、多くの人はそのまぬけさに気がついていないだろう。そんなことをやったところで、完全に進入阻止なんかできやしないんだから。だってアメリカ方便の機内だって、あやしい人の周辺の人を隔離されるけれど、そのあやしい人たちがだっぴつと機内をうろうろして便所に入ったりにしている。いやそれどころか、現在はアメリカ便と比べると完全にアウトブレイク状態で隔離監視消毒と、ひどいめにあわされる。ところがアメリカから第三国(特にソウル)経由で乗り継いで帰国する人はフリーパスなのだ。「調子悪かったら連絡してね」という黄色い紙をもらうだけなんだよ。



写真提供 共同通信社
新型インフルエンザ感染が確認された3人が搬送された成田赤十字病院。正確な情報を受け手が正しくないと、煽動されることがある。

豚インフルエンザ騒動と日本の煽動報道
野放しの当局にも問題はないだろうか

それなのにそこで、上陸阻止とか水際ナントカとかまことしやかな話をするから(あるいは何を想定しているかきちんと教えてくれないものだから)、国内発生したとかしないとかで大騒ぎする。「月に三〇人くらい感染者が出るのは想定内です」というくらいの見込みを出す、みんななほとは焦らずにすむと思うんだが。そういう基本的な想定が見えないところで、報道は煽る方向ばかりに動く。五月頭、感染疑いの人が何人か出ていた頃、新聞は「疑似例十五人」という見出しを出した。でもその時点で、そのうち十四人はすでに疑いが晴れていたことはわかっていて(その記事にも書いてあった)。だったら数を水増しするような報道は避けるべきじゃないの? そして当局も、まだわからない部分はあるし、これから突然変異するかもしれない、万が一に備えてやばめに言っておけば安心と思つて、そういう煽りを抑えようと思わない。おかげで海外旅行取りやめとか、アメリカメキシコに限らず海外出張全面禁止とか、ヒステリーとしか思えない対応がやまほど見られ、高校生がカナダでマスクしなかつたとかでいじめられて……もう少し現実的に考えて、現実的な対応しようよ、と思うんだが。